

## 5 . 日米都市防災会議報告

2003 年 3 月にマウイ島で日米都市防災会議が開催されました。林春男新会長に報告をしていただきました。



林春男 地域安全学会新会長

第 7 回日米都市防災会議が 3 月 23 日から 26 日まで、マウイ島のアウトリガーマリオットワイレアリゾートを会場として開催されました。3 月 20 日から始まったイラク戦争の影響で、日本側からは 10 名、アメリカ側も DHC から参加が取りやめになるという緊迫した幕開けとなりました。それでも日本からはアメリカの 31 名をしのぐ 48 名（総勢で 59 名）が参加しました。

会議は 23 日夕刻からの海辺の芝生で開かれた海に沈む夕日を見ながらのリセプションから、日米うち解けた雰囲気が始まりました。翌 24 日の午前は全体会議で、8 時 30 分からはカリフォルニア州 OES の Richard Eisner 氏と熊谷良雄地域安全学会会長により 20 年におよぶ日米都市防災会議の歴史を振り返る基調講演をいただきました。その後 9 時 15 分からは「ノースリッジ地震と阪神淡路大震災からの復興に関する教訓についてのパネルディスカッション」を、日本側からは室崎・大西・小浦・立木先生、アメリカ側からは Kenneth Topping, Laurie Johnson; Dan Alesch の各氏をパネリストとして開催しました。昼食では Lunch Time Lecture として EERI の Marjorie Greene が “ The Web-based World Housing Encyclopedia: Housing Construction Types from Earthquake Prone Areas of the World “ について紹介しました。

24 日の午後は 10 のワーキンググループに分かれて議論を行いました。ワーキンググループのタイトルと日本側の座長は次の通りです。

- (1) Real time damage assessment tools: Lind Gee & Satoshi Tanaka, Co-Chairs
- (2) Risk communication: Robert Olson & Masayuki Kohiyama, Co-Chairs
- (3) Long term recovery: Charles Eadie & Norio Maki, Co-Chairs
- (4) Recovery policy: Kenneth Topping & Hisako Koura, Co-Chairs
- (5) High tech countermeasures: Ronald Eguchi & Kimiro Meguro, Co-Chairs

- (6) Organizational structures: Susan Tubbesing & Yoshinobu Fukasawa, Co-Chairs
- (7) Interoperability: Guna Selvaduray & Shigeo Tatsuki, Co-Chairs
- (8) Approaches to earthquake mitigation programs:  
Charles Scawthorn & Hitomi Murakami, Co-Chairs
- (9) Approaches to tsunami mitigation: Richard Eisner & Kenichi Ishibashi, Co-Chairs
- (10) Collaborative programs: William Anderson & Masayuki Watanabe, Co-Chairs

25 日午前は再び全体会議に戻り、消防庁の関審議官と内閣府の筒井氏から最近の日本の防災についてご報告をいただきました。その後、地震防災の面での国際貢献のあり方について、日本側からはJICAの渡辺氏、アメリカ側からはShirley Mattinglyは講大いに議論になりました。その日の昼食ではLunch Time Lectureとして文科省が最近まとめた「防災研究の推進方策」について林が報告しました。午後はワーキンググループの議論のまとめに入りました。

26 日の午前は全体会議で、各ワーキンググループからの議論内容の報告がありました。最後は神戸市の中野氏が神戸市の復興の様子を紹介するとともに、2005年春に「第8回日米都市防災会議を神戸に招聘したい」という神戸市の内山危機管理監のメッセージを読み上げました。

最後にNSFのデニスウェンガーがアメリカ側の参加者に向けて辛口の次のようなコメントを

- 1) 応用研究ばかりでは困る、Basic Researchをやってほしい。
- 2) NSFは7回目、8回目の会議は支援しない。1回目、2回目といった新しい試みを支援する
- 3) いつまで同じ顔ぶれでは困る、日本側のように新しい人、とくに若い人を呼べ
- 4) 復興の総合理論を知りたい

以上のようにマウイ島の素晴らしい環境のもとで、大いに議論ができたアメリカ側にいわせることができた2日半のワークショップとなりました。ご参加いただいた皆様とその実現のために努力していただいた皆さんに改めて御礼申し上げます。

(前日米都市防災会議担当理事 林 春男)